The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞石田光規『孤立不安社会 ： つながりの格差、承認の追求、ぼっちの恐怖』第1版、勁草書房、2018年、288頁、定価3,080円
Author(s)	萩之内, 大
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 268-271
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

石田光規
『孤立不安社会―つながりの格差、承認の追求、ぼっちの恐怖―』

第1版、勁草書房、2018、288ページ、3,080円

萩之内 大

これまでに人間関係に対して不安を覚えた経験はないだろうか。自分が孤独であると感じたことはないだろうか。評者はこれまで、実際には友達がいて一人でいるわけではないが、孤独や不安を感じた経験がある。著者である石田は、本書において、そのような人間関係に対する不安や孤独感、そして社会問題ともなっている孤立に関して、社会構造の変化に着目しながら論を展開している。

本書の著者である石田光規は、社会学のネットワーク論、人間関係論の専門家であり、現在は早稲田大学で教鞭をとっている。本書は、序章、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、終章からなる本論と、本論では扱われなかった情報通信機器と人間関係について述べられる補論で構成される。以下では、まず各章の概要について確認する。

序章では、孤立に関する問題を大まかにまとめ、現代の日本人における人間関係の特徴について量的データをもとに提示される。

第Ⅰ部（第一章と第二章）では人びとのつながりの格差と、つながりによってもたらされる承認の格差について扱われる。第一章では社会構造の変化によりつながりや承認の形が変わること、それらの変化による問題について婚活を例に論じられる。関係の構築や決定が個人に委ねられるようになった社会では、自由を手に入れると同時に、ずっと一人なのではないかという不安も抱えるようになる。この不安が承認の獲得を求めさせ、人びとを婚活へと参入させるが、婚活は承認される人とされない人とのコントラストを明確にする。第二章ではつながりが学歴や収入に左右され、それが格差化していくことを様々なデータをもとに論じられる。選択的関係が主流化した社会では、資源の量に応じて結婚できるかどうかが選別され、さらに学歴や職業による同類婚を通じてカップル間の格差も拡大してゆく。

第Ⅱ部（第三章と第四章）では孤立と自己決定の関係や孤立の重層的な問題について扱われる。第三章では孤立死について検討される。自己決定概念は、決定者の属性や社会からの影響を避けられない。それらの影響による差を解消し公平性を保とうとすると、自己決定概念の重要な要素であった「決定者の自由」を阻害する、という矛盾が生じる。孤立死問題は自己決定の問題ととらえるのではなく、何らかの介入を通して解決すべきであり、その場合は程度の議論が重要である。

大阪大学人間科学研究科博士前期課程一年；u419882h@ecs.osaka-u.ac.jp

第四章は、第二章で明らかになった、学歴や収入によってつながりに差が生じることに加え、文化資本（本書では養育方針や生活態度）も関係していることが論じられる。親の学歴や経済力が、子に対する面倒見に影響し、その面倒見が子の孤立に影響力を持つという。石田曰く「現代の孤立現象には、生活レベルにまでおよぶ象徴的支配がしみこんでいる」のだ。

第Ⅲ部（第五章と第六章）では地域のつながりについて扱われる。第五章では、これまでの様々な言説をもとに「一定以上の濃密さを持つ関係」の質的変化によって、その関係から地域・近隣関係が除外されたと述べた上で、全国調査と多摩市調査をもとに、量的側面から日本社会に暮らす人々がどのような近隣関係を望んでいるか検討される。社会構造の変化によってもたらされた人間関係の変化により、「一定以上の濃密さをもつ関係」が感情を基軸として結ばれるようになった。その関係は家族などの親密な仲で結ばれる。すなわち、親密な関係が求められていない地域・近隣関係には互助を行うような関係は期待できない。第六章では、多摩市の事例をもとに、地域でつながりを再編することの難しさについて述べられる。多摩市の中で、住民の階層にそれぞれ違いがある三地区の分析を通じて、地区ごとにつながりを再編する困難自体が異なることを浮き彫りにする。

終章ではこれまで見てきた現代社会の孤立・不安の問題をどのように解決していくかが検討される。その解決案としては大きく二つの軸で記述されており、一方が「孤立した人がその状態から脱却する仕組み」を軸とするものであり、他方が「多くの人びとが孤立に対して不安を抱く社会への対応策」を軸とするものである。一つ目の孤立から脱却する仕組みに関して石田が着目するのは、問題当事者と、その当事者から遠い存在との関係のような「弱い紐帯」である。この弱い紐帯が持つ、遠い存在だからこそ弱さや問題を表出させやすいという問題解消効果を活かしながら、日々の生活で多く触れることができる場所に支援の場を設けることが重要だと論じられる。二つ目の孤立不安社会への対応策としては、現在の選択化・自由化した関係に安定性を加えた「新たなつながり」をもとにした連帯を構築することである。しかし、実現は容易ではなく、孤立不安社会に対応する策は継続的に考究が必要とされるものと結論付けられる。

補論では、本論で扱われていなかった情報通信機器と人間関係について記述される。石田は、情報通信機器は人間

関係を根底から大きく変えるという論点ではなく、むしろ両者の間にいくつかの特徴的な現象を生み出すという論点を強調する。情報通信機器によって常時接続が可能となり、SNS をはじめとするコミュニケーション・コンテンツは孤立不安社会における逃げ場の現象として現れている。また、履歴や既読機能によりコミュニケーションが可視化されることで、自分が受け入れられているのかどうかがはっきり分かるようになり、それが承認欲求の毀損可能性を引き起こす現象としても現れている。コミュニケーション・コンテンツは、不安を解消するわけではない。人々は不安を原動力に、よりコミュニケーション・コンテンツに没入していき、さらに情報通信機能の充実につながっていく、と石田は指摘する。

以上を踏まえて評者自身の見解を述べておきたい。本書では社会構造の変化に伴う人間関係の維持や構築の変化が孤立不安と関わっていることが述べられているが、その背景として、社会保障サービスの充実が挙げられていた点が興味深いと感じた。「現代社会のように、人びとの生活を消費および国の提供する社会保障サービスが補填するようになると、人びとが固有の人と付き合う必然性は低下」(P.4) する。すると血縁や地縁によってつながるメリットが薄れ、自由に関係を結べるようになることで「選ばれない」可能性が発生し、不安を喚起する。つまり、石田の議論をきっかけとして、社会保障という一般的には善とされているものが、つながりの視点からみれば悪の役割を果たすという論点をも取り出すことが可能である（善悪という表現は評者によるものである）。このように、本書は多角的に物事をとらえ、議論し、考察することで、読者自身にも思考を深める論点を至る所に配置した優れた著作である。また、質的アプローチと量的アプローチとを織り交ぜながら話を展開し、より説得力を持たせている点においても、良著であると言えよう。

しかし、終章の二つ目の対応策をめぐる議論においては、伝統の可能性（宗教的な利他性）について触れながらも、突如として宗教的利他心が浸透するとは考えづらいと判定を下し、家族との関係の再編を考える方が早急な解決案としてよりよい、といささか性急な議論が展開される。この点では、選択肢を狭める形で議論を展開するのではなく、孤立不安社会への対応策という重要な課題だからこそ、宗教的利他性のような長期的な視点からなされる議論も有効である、と評者自身は考えたい。

評者は、孤立や不安に悩まされている人がいるならば、少しでもその悩みを解消できるような社会にしていきたいと考えている。そのためには自己責任論を押し付けるのではなく、社会的構造に課題があることを適切なやり方で周知し、共に解決に向けて取り組むことが重要であろう。本書で扱っている孤立不安に限らず、一見自己責任として片づけられそうな課題が、実は社会の構造的課題である可能性は大いにある。特に「共生」を考える上では非常に重要な視点であると感じる。その視点を得るという意味でも、本書をぜひ、一読していただきたい。